

ユトリロへ眼の行くかぎり春うれひ

藤田湘子

ユトリロはフランスの画家。どこかうら寂しい感じの
パリの街角やモンマルトルの風景画を思い出す。「眼の
行くかぎり」という情景は、複製画かりトグラフが部屋
に飾られているのか、または美術館で出会ったユトリロ
の絵か。「春うれひ」と取り合わされているところをみ
ると、何か思い出とつながっているのだろうか。

「洎さ夫藍ふらんを買ひユトリロの空を負ひ」の自註に、「秋
櫻子の影響で二十代に印象派の絵に親しんだ。はじめは
ユトリロが好きで、昭和二十五年『馬酔木』に書いた『ユ
トリロの眼』が私の俳論らしいものの走り」とある。

掲句は昭和五十九年三月一五日作。『去来の花』所
収。同日作に「わが捨てし望みの数や西行忌」もある。

1984年（559作）第七句集『去来の花』鑑賞・野本京